

五郎時致

長唄 全詞章

資料の題名「時致」

曾我物

〔本調子〕 さるほどに、曾我の五郎時致は俱不戴天の父の仇うたんずものと、たゆみなき
彌猛心も春雨に濡れて廓の化粧坂名うてと聞きし少将の

〔合方〕 雨の降る夜も雲の日も、通ひかよひて大磯や、さその諸分けの、ほだされ易く誰に
一筆仮のつて、野暮な口舌を返す書き、粹な手管についてのせられて

浮気な酒よ宵の月、晴れてよかろか濡れぬがよいか、とかくそむかふ春の癖

いでオ、それよ我もまた、何時か晴らさん父の仇、十八年の天津風、今ぞ吹きかへす念力の、
岩をも通す矢先やら

げに勇猛血氣のありさま、また牡丹花に翼ひらめく小蝶の如く、勇ましくも又、藪の
鶯けなげなり

〔三上り〕 まだ啼かでうらやましきの庭の梅、あれそよそよと春風が浮名たてて、小吹き送る
堤の葦鷺草を、露の情に濡れた同士、色と恋との実くらべ、実浮た仲の町よ、やよ

孝勇無双のいさほ、あら人神と末の世も、恐れ崇めて今年又、名のお江戸の浅草に開帳あるぞ
賑はしき